



徒然草 part 2

男と女、または狐と狸のこと

人間には「男族」と「女族」の2種類がある。どちらが相手に対して主導権を握るかで、虚々実々のかけ引きが昼夜を問わず行われている。それはまるで狐と狸のばかし合いのごとく、ダイナミックかつスリルに富んだものである。

亭主関白などと言われ、あたかも「男族」に分があるかのように喧伝されてはいるが、これはほとんどない誤りである。先人の言わく、「犯罪の影に女あり」男を裏から操らんものと、「女族」は日々瓜を研ぐのである。

現在の戦況は、残念ながら「狡猾さ」の面で劣る純情狸的「男族」に不利である。わが身をふり返り、思いあたる各人は一層の奮励努力をされたい。

煙草のこと

天井を見上げて、煙草の煙をはく。うす青い煙をじっと見つめ、「アー。わたしはまた吸ってしまった」と思うのである。

体に悪く、大半は税金であり、街路をよごし、火事の原因にもなるというのに、なぜやめられないのだろう。意志薄弱なわたしが悪いのか、吸わせる公社が悪いのか。

聞けば煙草というやつは、大変な輸入超過であるという。こうして燃やしているのは、実は煙草なんかではなくて、大切な大切な外貨ではないのか。外貨がなくなれば、日本の貿易は、いや日本人の生活はどうなるのだろう。そうなれば日本は不況になる一方だし、国の財政事情も悪化する。少しでも国家収入の足しにでも思うなら、煙草を吸って間接税を納めた方がよいだろう。しかし煙草を吸えば……。

頭を使ったので疲れてしまった。どれ一服。

本のこと

本の利用法には4段階ある。

- (1) 本を読む (最高の利用法)
- (2) 本を眺める (普通の利用法)
- (3) 本を他のことに使う (まあまあの利用法)
- (4) 本を積んでおくだけ (最低の利用法)

一番多いのが(2)と(3)である。(1)などはなかなかできるも

のではなく、「眼光紙背に徹す」に至っては夢のまた夢である。

煙草プカプカで本を広げているのは(2)である。内容は頭の中を素通りしていく。

枕にしたり、へそくりや顔を隠したり、あるいは重しに使うのは(3)である。全然理解できずに眠くなる本は、睡眠薬の代用として(3)の利用法をおすすめする。

(4)の利用法を採る人が最も多いが、これは資源のむだ使いである。注意しよう。

写真のこと

最近では「若き日の思い出」と称して、素人の女性がパッと脱いで写真のモデルになってくれるそう。これは女性の意識が変化したからか、それとも「くどき」の技術が向上したからなのか。いずれにしても撮る側からすれば大いに楽になったものですね。

カメラの向上もめざましく、マグネシウムを焚いて撮るなんてことはもうない。レーザーを使った「フォノグラム」なんていうのもでている時代である。

やがては撮らなくても写るカメラなんてのはできないかな。もっともそれでは「目の保養」にはならないか。

「ハナ」のこと

「華」といえば、はなやかな、はれがましいイメージである。「花」は、美しく可憐な感じである。「鼻」になると、生物学的なイメージが鼻につく。「洩」に至っては、○○○である。(一部伏字)

言葉、特に漢字は、このように固有のイメージを見る物に与える。

われわれの顔も、固有のイメージを他人に与える。さて、あなたの持つイメージは上の4つのどれにあてはまるのか、今夜じっくりカガミと相談すべし。(伊藤)

迷解植物辞典 (第5回)

【ひ～む】

ひるがお (昼顔) ……〔原義〕 ひるがお科の多年生つる草。山野に生じ、夏の昼間、朝顔に似た、うす紅色・じょうご形の花を葉のつけねに単生する。朝開いて午後閉じる。若葉は食用、全体を乾して利尿薬とする。

〔派生〕 昼顔があれば、朝顔、夕顔というもある。朝顔はひるがお科の一年草で、アジア原産である。一方夕顔はウリ科の一年草で、インド、アフリカが原産である。古くから栽培され、「ふくべ」、「ひょうたん」というのは夕顔の変種である。

よもや夜顔はあるまいと思うと、これが誤りで、ちゃんど存在する。ヤカイソウ(夜開草)とも言い、ひるがお科の一年草で、南アメリカからフロリダ州にかけての原産である。7～9月頃の夕方開いて、翌朝まで開花し、芳香を放つ。

ふき (蔞) ……〔原義〕 きく科の多年草。山野に生じ葉は大形。葉柄は中空で、早春、白色の頭状花を開く。葉柄は食用。

〔派生1〕 「ちかれたび一。」で有名になったのが、「アキタブキ」。その他にミズブキ、アイチブキ、アカブキなどがある。この「アキタブキ」という奴、東北地方から北海道、樺太、千島に分布している。蔞の中では変種に属し、葉の直径1m、柄の長さ1.5mにも達する。

〔派生2〕 付記すれば、不羈な男が不軌をたくらみ、ついに不帰の客となった。(訳：つけ加えれば、奔放な男がむほんをたくらみ、ついに死んだ。)

べにてんぐだけ (紅天狗芋) ……〔原義〕 てんぐだけ科の大形きのこ。アカハエトリ、アシタカベニタケともいう。高さ10～20cm、カサの直径10～15cm、真紅のカサの表面に白いイボイボをのせ、華麗な毒きのこである。

〔派生〕 毒性はそれほどでなく、むしろ美味である。ヨーロッパの一部では、塩水でさらし毒性を除いて食べることもあり、これを食べると一種の興奮状態にな

る。昔のバイキング達は戦いの前にこれを食べ、勇猛心をかきたてたという。

現代では勇猛心をかきたてようにも、その対象がない。せいぜいマージャンで危険牌を捨てることぐらいか。

ほうれんそう (菠薐草) ……〔原義〕 あかぎ科の一年草。夏、黄緑色の花を穂状に開く。葉は食用。

〔派生〕 ポバイがいざという時に食べれば、アーラ不思議、もりもりと力が湧く。考えてみれば、ポバイのほうれん草はいつもカンヅメ入りだった。今は高原の空気までカンヅメになる時代だが、反面空きカン公害が問題になる時代でもある。今ならポバイは空きカンの不法投棄で「タイホ」されるかな。

マーガレット (Marguerite) ……〔原義〕 きく科の多年草。葉は白色をおび、夏、白色・舌状の花を開く。

〔派生〕 毎週130円で本屋さんの店先に並ぶ少女向けの「花」。内容はといえば、もうひたすらに純愛路線である。あの「ベル・バラ」もここから生れた。適令期の女性も好む「花」だからといっても、独身男性の参考には全然ならない。

みかん (蜜柑) ……〔原義〕 ヘンルウダ科の常緑小きょう木。6月頃白くて香りの良い花を開く。実は食用。

〔派生〕 紀国屋文左エ門は、嵐の中、みかんを江戸まで運んで莫大な利益を得たとされているが、最近これは誤りで、じつはピーナッツを運んだことが判明した。(わかるかなー。わかるだろうなー。)

むらさき (紫) ……〔原義〕 むらさき科の多年草。山野に生じ、夏、白色の花を開く。根は紫色の染料用。

〔派生〕 料亭、料理屋ではしょう油のことを上品にこう呼ぶ。われわれの行く飲み屋では、しょう油は「しょう油」であり、勘定のときも「おいそ」とは言わずに、「いくら？」または「つけ！」と言う。

(伊藤)